慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	木村芥舟日記記載の福澤諭吉關係史料
Sub Title	Articles on Yukichi Fukuzawa in the Kimura Kaishu's diary
Author	河北, 展生(Kawakita, Nobuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1957
Jtitle	史学 Vol.30, No.2 (1957. 11) ,p.114(250)- 128(264)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19571100-0114

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

木村芥舟日記記載の福澤諭吉關係史料

河北展生

木村芥舟と福澤諭吉との關係は、福澤が木村の從僕として咸臨丸で渡米して以來のもので、福澤は終生木村に對して恩人として接した事は、既に石河幹明著『福澤諭吉傳』に詳細に記され日記の一部も引用されているが、未だ木村日記に記された資料全體については紹介されて居ない。幸ひ慶應義塾圖書館に、木村の幕末の日記が收藏されて居るので、今福澤との關係が生じた安政六年以降の日記中より、福澤に關係の記事を拔出し、これに若干の解說を加え、福澤と木村の幕末の關係を紹介しよう。

嘉永六年以降の木村日記は左の六冊である。

己未日錄（自安政六年己未　至文久二年十二月）亥子日錄（自文久三年正月　至元治元年十二月）乙丑日錄（自元治元年十二月十八日　至慶應元年七月）客中日記（自慶應元年八月　至慶應二年八月）丙寅西航日記（自慶應二年八月　至慶應三年十月）丁卯戊辰日記（自慶應三年末　至慶應四年八月）

（番號）年月日

（一）文久元・三・三　福澤歐羅行被命候由

（二）同　三・一・三　夜福諭來談

（三）同　二・三　福諭來談

（四）同　二・三五　諭吉來談

（五）同　三・二　福諭來談昨朝中山氏割腹ノ談ヲ聞

（六）同　三・四　八半時頃內田被來面談晩吉岡來談此日廣口正藏之談ヲ聞長歎福諭も來

（七）同　三・五　福澤來

（八）同　八・三〇　福諭來話京師動搖開國ノ議起候由

（九）同　九・五　福諭來談

（一〇）同　九・一七　福諭來談

（一一）同　九・二三　福諭來談

（一二）同　九・二七　福諭來談

（一三）同　一〇・一　福諭來談

（一四）同　一〇・五　上田作福諭平馬錦平等來訪

（一五）同　一〇・一四　福諭高晋來話諭塞天外一丁魚一個贈來

（一六）同　一〇・二四　福諭來談使歐之議有之由

（一七）同　一〇・二九　福諭熊本藩士手島吳一郎ヲ拉來

（一八）同　一一・二　福澤より蒼松一大樹貰受今日植木や差遣し庭前へ移栽可喜之至

（一九）同　一一・六　福澤來話歐使大久保豐後池田修理岩田某被命之由

（二〇）同　一一・一三　福諭來話晩雜煮ヲ食

（二一）同　一一・二三　福諭來話

（二二）同　一二・七　福諭來談西航記一本來

（二三）同　一二・二〇　福諭來談

（二四）同　一二・二七　桂川仙石福澤へ山葵少々ツヽ分贈

（二五）同　一二・二九　福諭來小侍塚本幸次郎ヲ伴來

（二六）元治元　一・二　福澤來賀荷蘭船八隻仕出し差聞

（二七）同　一・一〇　福諭弦三來談

（二八）同　一・一三　福諭齊藤留金平等來賀

（二九）同　一・二三　福諭來談去十二月廿四日夜長州にて薩州船ヲ打拂船は沈沒乘組士分其外他人數死亡之由

（三〇）同　二・三　福諭來話

（三一）同　二・九　福諭來談

（三二）同　二・一七　福諭來話京師ニテ預參君六名出來ノ由一橋公春嶽容堂春山三郎會津

(三三) 同 二・二八 福諭來話去廿四日輪臺之詔布告之由

(三四) 同 三・六 福諭來

(三五) 同 三・一三 福諭より活潑尨魚三尾贈來ル同人へ
托ノ竹葉小半樽來ル

(三六) 同 三・一六 午下より御濱御出ニて倍行福澤ヲ從
南郊廣尾邊消遙到所桃季繽紛春風和照頗適意ヲ覺
且遊人も寥々尤妙歸路狐鰻へ立寄辨當晡時歸家
屈指十年前舊遊之地追想往事爲之撫然者久之

(三七) 同 三・一九 福諭來陸路歸省取極候由

(三八) 同 三・二三 福澤來彌明廿二晴次第出立之由木槍
一本借遣スコスト132預置福澤へ錢別團扇ニ繪紙
36枚遣ス榮翁持參

(三九) 同 三・二三 福澤今朝出立懸暇乞ニ來

(四〇) 同 六・二六 福澤子範本日歸府之由

(四一) 同 七・四 福澤子範來談國產之土產獻呈

(四二) 同 七・七 晡時桂氏新居ヲ訪ふ永井福澤一席斫
鱠品畫又小舟ヲ泛赤石橋下へ出納涼頗妙歸路汐留
より上陸四時頃歸家

(四三) 同 七・一二 福澤より墨竹來 橫濱臨時新聞肥田より來九日英船歸港長州ノ
也件

(四四) 同 七・三 福諭來談

(四五) 同 七・二五 福澤より鮮魚一盆來ル右之內ヲ肥田
へ少々出ス

(四六) 同 八・六 夜九時より大橫町より出火此方風筋
も稍不宜一同戒心肥田福澤弦三等追々來救器具少
々取片付候處追々風筋宜相成神明町より大門之方
迄出曉六時鎭火

(四七) 同 八・二五 福諭來 廿二日出板金川新聞紙ヲ見記十六日長州和議之事也

(四八) 同 九・一 福諭來

(四九) 同 九・一一 福諭來訪

(五〇) 同 九・一四 佛海軍學校規則福澤所記 肥田より返來矣
田堀暫時借遣ス

（五一）同　九・二〇　福澤より鮮鰯七尾贈來

（五二）同　九　晦　福澤へも比目少々遣ス

（五三）同　一〇・六　福澤諭本日被召出新規百苞被下外國
飜譯御用被仰付百五十苞高ニ御足高被下

（五四）同　一〇・三　早曉秋漁大獲比目大少十枚午尾三十
一枚鱸二也八洲5覺張5成瀨5福澤5肥田2井上彌三3山伏丁5御濱6等へ遣ス

（五五）同　一〇・一六　福諭來社銀献燒鰭

（五六）同　一〇・二六　夜福諭來談

（五七）同　一一・三　歸路福澤へ立寄月池謙道一席

（五八）同　一一・一三　福澤來話

（五九）同　一一・二三　福澤より鮮椎輩一籃贈來

（六〇）同　一三・八　福諭來談

（六一）慶應元　一三・一三　柳島様並福澤來

（六二）同　一三・一四　今朝榮次肝煎へ遣し答合之上歸府御
屆名代福澤へ相頼後刻同人玄蕃頭殿御宅へ歸府御
屆書持參公用人へ面會相渡

（六三）同　一三・二九　尾福ニ遣し候右之白魚小重福澤へ遣
し候

（六四）慶應二・一・一　福澤來賀

（六五）同　一・五　福澤來

（六六）同　一・晦　福澤一寸來候由

（六七）同　二・五　午前福澤被參昨日托し候御判今日兵
部殿江相濟持參直ニ角藏爲持□宿へ遣ス

（六八）同　三・二七　午前福澤來今朝御判相頼候由ニ而宮
□頭殿ニ而相濟二通持參直ニ板倉屋へ遣ス請取出
來ル

（六九）同　四・朔　夜四時過神明町邊失火西南風筋不宣
直ニ取片付候追々御濱より内田給北堀馴其外手傳
ニ來大工左官伊助も駈付土藏戸前打妻兒は一寸江
川内肥田へ爲立退候追々正南風ニ相成門前町屋不
殘燒拂露月丁ニて鎭火朝五時頃相濟、肥田濱福澤
濱口與右衞門青木南藏清川馬場初太郎等來ル赤松

林家等桂川等より家來來働候事

(七〇) 同　四・四　板倉屋より火事見舞菓子折來ル右ヲ福澤へ遣ス來月分御扶持方手形も賴遣ス

(七一) 同　四・三　福澤來五月分御扶持方手形御判丹波守殿ニ而相濟直ニ板倉屋へ遣ス

(七二) 同　五朔　榮翁來福澤へ手形三通相賴遣ス

(七三) 同　五・三　福諭被來賴置候手形三通共縫殿頭ニ而御判相濟持參直ニ板倉屋へ以角藏遣ス請取出來ル

(七四) 同　五・二四　福澤へ伊唉魚五尾ヲ遣ス頗新鮮也

(七五) 同　六・一　榮翁來七月分手形福澤へ賴遣ス

(七六) 同　六・九　福澤來七月分手形玄蕃殿ニ而御判相濟、

(七七) 同　七・一　福澤へ八月分御扶持方手形爲持遣ス

(七八) 同　七・七　午時福澤來話午飯出ス福澤刀來觀

(七九) 同　七・一〇　福澤へ今朝刀返却新聞紙一冊來ル

(八〇) 同　七・一四　福澤へ新聞紙一冊返却

(八一) 同　七・一八　福澤より新聞紙來ル

(八二) 同　七・一九　月池小笠原氏より文通新聞紙原本借し遣ス

(八三) 同　七・二〇　月地小笠原氏より新聞紙返し來直ニ福澤へ爲持返却

(八四) 同　七・二三　福澤へ新聞紙取遣ス袱も返却留守ニ付預置

(八五) 同　七・二五　福澤より文通明日可相越由也

(八六) 同　七・二六　第5時頃退出御□□迄勤歸來雜□來福澤外ニ二名も來藤澤梅南も來

(八七) 同　七・二九　朝福澤來建白書一示鯉魚數尾ヲ献

(八八) 同　七・晦　福澤林井上信野村へ此程之答禮ニ魚遣し候由

(八九) 同　八・一　福澤より新聞紙來ル

(九〇) 同　八・一七　夜營中より文通福澤へ譯文賴遣ス

(九一) 同　八・一八　福澤より譯文出來御局へ持參
(九二) 同　八・二九　福諭來送中津荷物之儀賴來ル
(九三) 同　九・六　第九時半壹岐殿御旅宿へ相越御逢有之福澤ノ見込書等モ上ル　一兵庫港より荷物到着中津之分も渡し遣ス
(九四) 同　九・二六　江府へ此度長鯨便ヲ以藤澤へ一封宅狀中へ福澤へ一封榮次へ一封遣ス
(九五) 同　一三・八　大內記殿本日御用濟明日出立之由委細傳言等相賴ミ致布村良助へ左之通相托し遣ス
一土岐肥州へ一封　一志州へ一封　一家書並福澤へ一封
(九六) 慶應三・一・四　舊臘廿八日出之御用狀江戶同役等より來ル石炭積取方等之□□也　一同日出小笠原□□福澤より一封外ニ家書兩通來ル具足□帶之一條等申來ル
(九七) 同　一・九　大坂より別建便ニ而相廻候箇馬來福澤著述西洋事情百部來候也
(九八) 同　一・一二　御船便ニて舊臘念八日志州書並ニ西洋事情一部贈來再度宅よりも福澤所贈之一部來ル
(九九) 同　一・一三　平樂書林より事情五十部皆納爲禮として酒瓶一献呈
(一〇〇) 同　六・二七　福澤本日着之由一寸立寄留守中ニ付不逢
(一〇一) 同　六・二九　福澤へ着國祝鰹節一箱二方遣ス
(一〇二) 同　七・一　福澤來談一酌吉弦も來
(一〇三) 同　七・二　福澤よりアイロンコロート圖一張來ル
(一〇四) 同　七・四　福澤より引當金十物二ツ來ル
(一〇五) 同　七・一三　夜福澤來
(一〇六) 同　七・一四　福澤本日より引込候由
(一〇七) 同　七・一六　福澤より留守中一書亞行紀事一本來
(一〇八) 同　七・一七　福澤へ旅案內一本返却

（一〇九）同　八・二八　福澤へ兩小冊返却亟之助へ一封賴遣ス

（一一〇）同　九・四　留守中福澤來訪

（一一一）同　九・一〇　歸路月地福澤並桂氏へ立寄

（一一二）同　一〇・二七　福澤本日出勤由

（一一三）同　一二・三〇　福諭荷物之儀ニ付織田和泉長井筑前古賀筑後等へ申談いつれも承知也

（一一四）慶應四・一・二四　石川周二來談福澤も携兒來

（一一五）同　二・一三　福澤來學校之相談有之

（一一六）同　二・一四　福澤來談　夕福澤新居ヲ訪肥田一席學校借屋之議アリ

（一一七）同　二・二三　福澤來

（一一八）同　三・四　本夕より福澤塾生此方表坐敷ニ暫時差置吳候樣申聞直ニ多人數參候事

（一一九）同　三・五　福澤本日五半□御斷申上候由申聞

（一二〇）同　三・一二　五候鯖ヲ山伏丁福澤等へ遣ス

（二五六）　一二〇

（一二一）同　三・一三　夜福澤並小副來

（一二二）同　四・二九　福澤へターフル遣ス

（一二三）同　閏四・一九　夜福澤來モンブラント一件紛擾出來候由

（一二四）同　六・六　福澤細君來鮓一重持贈

（一二五）同　六・八　福澤子來御暇願差出候由

（一二六）同　六・一〇　夕福澤來本日督府之命ヲ以早々上洛ヲ被申渡候旨也

（一二七）同　六・一四　大幸へ賴置候荷蘭署一俵來肥田福澤へ少々ツヽ分配

（一二八）同　六・一六　夜福澤來談

（一二九）同　六・二一　夕刻より福澤招參一酌喫鮮塾寮其他新營頗宏壯

（一三〇）同　六・二三　福澤より事情外編横死辨慶等借讀

（一三一）同　六・二四　福澤へ一昨日之借書返却

（一三二）同　七・一六　夜福澤來談葡萄一藍贈來

(一三三) 同　　七・二六　午下福澤へ行

(一) 最初の記事である。福澤と木村の交渉は、萬延元年渡米の際以來續けられたのであるが、日記に見える交渉度からみて、餘りに遲い感がする。福澤の『西航記』によると、渡歐の命を受けたのが十二月二十日、二十二日には英軍艦に乘込んで居る。したがつて渡歐の命を受けて乘船する迄の期間は誠に短く、その多忙さは充分推察出來るのである。その多忙さの中から特に木村家を訪れたことは、福澤の木村家に對する態度を示す好資料として注目すべきものである。猶福澤は歐州旅行中、ペテルスブルグより書翰を送つて居る。文久二年十二月十日品川に歸着、翌十一日に上陸しているから、福澤は必ず年内に木村家を訪問、歸朝の挨拶をして居ると思はれるのに、木村日記に全然記すところがないのは、少し不思議に思はれる。

(八) 京師動搖とは、所謂八月十八日の政變が生じて、それ迄京都に絕對の勢力を振つていた長州藩を中心とする尊皇攘夷派が失脚し、これに代り、公武合體を主張する薩摩藩の勢力が京都に有力となつた事を指すのである。

(七―一五) 此の頃福澤は、新錢座の二階建小家屋から、再び築地鐵砲洲の中津藩中屋敷に移つているが、その移轉時期が明らかでない。福澤の恩師緒方洪庵が死んだ六月十日には、新錢座より馳け付けたと云ひ、長男一太郎は十月十二日に鐵砲洲で生れて居るから、一應此の期間内に移轉を考へねばならないのであるが、福澤が今回借用した長屋は、五軒續き一棟である。中津藩より一棟の長屋を借用する事が出來たのは、恐らく文久二年、參覲交代制度の改革と、妻子の國許住居が許された結果、在府人員の多くが國許に引上げたため長屋に空屋が生じたからであらうと思はれる。中津藩の在府人員が國許に引上げたのは、大手門警備、京都勤番等を命じられた關係から、他藩よりやゝ遲れて、文久三年七月頃であつた。したがつて福澤の鐵砲洲への移轉は七月以降であつたと思はれる。亦、八月三〇日以

降、かなり瀕繁に木村家を訪問しているから、移轉は既に此の時終つていると考へられる。したがつて、福澤の鐵砲洲への移轉は、七八月の間に行はれたことが、推測出來る樣に思はれる。

（一八）使歐之議とは、二度目の歐州への使節派遣の事であらうと思はれるが、使節派遣決定の日付については、十一月三日付で、池田筑後守、河津三郎太郎の兩名に內意を傳えたものが最も早いのであるが、其後（一九）にもある如く、大久保豐後、池田修理、岩田等が派遣を豫定されたこともあり、使節派遣については、複雜な事情が存した樣であるが、明らかでない。恐らく木村が福澤より聞いたのは、最も早い日付ではなからうか。

（一八）福澤が木村に松樹を贈つた事から直に考へられる事は、福澤が此年の六月迄は確實に住んで居た新錢座の小家屋の庭園にあつたものを、移轉するにつけ、木村に贈つたものと一應考へられる。したがつて福澤の鐵砲洲への移轉は此の日より以後となるのが順當である。然し、一太郎が鐵砲洲で生れた事實と明らかに矛盾して來る。したがつて此日以前に既に福澤が鐵砲洲に移轉して居たと考へねばならない。福澤が木村に贈つたのは松樹である。この木は特に移植の時期を選ぶ木である事を考へると。福澤が移轉が決つた頃に木村に贈樹の事を話し、移植に適當な期の來るのを待つて移植したと見る可きであらう。

（一九）此處に福澤が報じている使節大久保豐後、池田修理岩田某の三名は。同日付で佛國書記官へ報告した使節の姓名と同じで、岩田某は岩田半太郎である。前にも觸れた如く、此の使節派遣については、相當問題があつた樣で、十一月三日付で池田筑後守と河津三郎太郎の兩名に遣歐の事が命ぜられて居るものと（幕末維新外交史料集成第六卷三頁所收資料）、大目付大久保豐後守、外國奉行池田筑後守、河津三郎太郎、御目付岩田半太郎の四名に對し命じたもの（改訂肥後藩國事史料卷四四二八頁所收）があり、十一月

六日付佛國書記官への書翰では、河津を除いた三名が記されて居る。結局正使池田筑後守、副使河津伊豆守、目付河田相模守が正式に決定したのは十一月廿八日であるが、大久保岩田を止めて、池田を正使として派遣することに内定したのは、召連人員について池田が申稟している十一月十四日頃ではないかと思はれる。六日より十四日の間に、大久保岩田の派遣が取消されたのであるが、此の變更の理由については何等知る所がない。福澤は恐らく佛國書記に報知した十一月六日付の書翰の系統の情報を得て、これを木村に報吾したものと思はれる。

(二二) 西航記は、恐らく福澤が遣歐使節に隨伴した際の旅行記であらうと思はれるが、何の爲に木村にこれを示したかは明らかでない。

(二九) 文久三年十二月二十四日、幕府が薩摩藩より借用中の氣船長崎丸が田之浦沖に碇泊中、長州藩の奇兵隊が砲撃した爲、船は火を發して沈沒するに至つた事件のことで、恐らく此の頃に江戸に傳へられたのであらう。

(三二) 文久三年末、島津久光が中心になつて、京都に於ける諸侯會議開催について努力し、特に朝廷内部の因循を訂正する爲には、所謂賢明諸侯をして朝議に參加せしめる必要があることを主張し、其の結果、同年十二月晦日に至つて、前將軍後見職德川慶喜、京都守護職松平容保、前福井藩主松平慶永、前高知藩主山内豐信、前宇和島藩主伊達宗城の五名に朝議參豫を命じたが、中心となつて活躍した島津久光は、身分の關係で遲れて、元治元年一月十三日に、從四位下左近衞權少將に任ぜられ、朝議參豫を命ぜられ此處に六名に達したのである。

(三三) 元治元年一月二十七日に、武備を修め武臣の職掌を盡すべしとの詔勅が將軍に下されたが、これが二月二十四日江戸に於て、在府の諸侯及び交替寄合布衣以上の役人に示すと同時に、將軍家茂の右の詔勅にたいする奉答書の寫をも見せたのである。恐らくこのことを云ふものと思はれ

る。

（三五）尨魚はクロダイの異名、魚に酒を添へたのであらうが、福澤の好酒家の面目が窺えて興味ある記述である。

（三七―四〇）福澤は安政五年、江戸出府の藩命を受けた時に中津に歸省して以後、此の時まで全然歸省していない。今度の歸省については母を見舞ふと共に、然る可き同藩の子弟を得て、共にその學塾を經營したいと考え、適當な人物を物色したのである。其の結果『福澤諭吉傳』にも述べている如く、種々說得のすえ、小幡篤次郎兄弟等六人の子弟を伴つて歸府したのである。福澤の身分としては旅行の際は槍を立てゝ旅行することになつて居るので、木村より木槍を借用している。その際福澤は念の爲に、然る可き保證金を木村家に預けて行つたのではなからうか、おそらくコストは Cost であらう。福澤の此の方面に對する用意の周到さを知る良き資料である。

（四〇）福澤子範と云ふは恐らく福澤の雅號であるが、『福澤諭吉傳』の記述以上に知る所がない。

（四二―四七）此處に云ふ新聞紙とは、橫濱出版の外字新聞の譯で、福澤の譯したものである。福澤は此の譯新聞を諸藩に賣り、その代金で中津より連れて來た小幡兄弟等の中津藩士を養つたといはれて居る。

（五〇）佛國海軍規則を福澤が譯したといふことは、今日迄全く知られていなかつた新事實である。矢田堀は矢田堀景藏であらう。

（五二）福澤が正式に幕府に召抱られた事を示すものである。勿論この時より以前から幕府に出仕して居たのであるが、其のときの役職を示す資料は、今日まで全く不明である。この時福澤が幕府に召抱られたについて、奥平家より幕府に禮狀が差出されているばかしでなく、中津藩中でも、このことは相當評判になつた樣で、江戸詰の人より、早速この事が中津に報知されて居る。福翁自傳に一寸と旗本の樣なものになつた事があると記しているのは、おそら

くこの時以後のことを述べたものと思はれる。猶今日知り得る福澤の幕府に於ける役職としては、外國掛譯方次席まで進んだのが最高の様である。

(五七) 木村が福澤の家を訪問した最初であらう。それまでは恐らく身分違で、木村が福澤の家を訪問する事はなかつたのではなからうか。

(六七—七七) 扶持米貰受の手續を福澤に依頼して居るのであるが、板倉屋とは札差であるが、板倉屋の屋號を名乘る者は一四軒あり、そのいづれであるかは明らかでない。四月朔日の火事は、相當危險であつた様で、木村の妻子は、少し海寄りにある肥田濱五郎の家に避難した。江川内とあるは、江川太郎左衛門屋敷内の意味ではなからうか。

(七八—七九) 福澤が木村に刀をみせている。福澤は慶應三年秋に、家にあつた刀劍類を殘らず賣拂つているが、その一年前の此の時にその様な氣持があつたか否かは明らかでない。

(八七) 此の頃は丁度長州再征の最中である。此處に云ふ建白書とは、恐らく、(九三) の見込書と同一のものと思はれる。此の頃の幕府への建白書としては、昆野和七氏が『法學研究』第二十三卷第八號に「福澤諭吉の上書—長州再征に關する建白書寫本—」なる題目で紹介されている建白書が考へられる。昆野氏の説明によれば、紀州の某家より得た資料、おそらく山口良藏が筆寫せしめて岸嘉一郎に送つたものを紹介して居るのであるが、建白書は木村の手を通して、當時の幕閣の有力者の小笠原壹岐守に建白したものであることを知る事が出來る。そうした手續を明にして此の建白書を讀み直してみると、福澤の建白書に亦異つた意味合が生じて來る。

(九七—九九) 西洋事情は初編を指すものであらうが、これが出版は、慶應二年秋であり、當時の人々に非常に強い影響を與へた様であるが、此の一文は、西洋事情が非常に賣れた事を示す良き例證である。福澤が依頼して西洋事情を京

都に出したものか、或は木村より注文して取寄せたものかは明らかでないが、恐らく木村の注文に應じて發送したのではなからうか。猶福澤が木村の留守宅に西洋事情を献呈して居る點から考へて、慶應二年八月末には未だ西洋事情が出來上つて居なかつたと見る可きではないかと思はれる。

(一〇〇) 福澤が二度目に米國に行つて歸國した挨拶である。

(一〇一) アイロンコロートは ironclad の事であらう。福澤が渡米した目的は、文久二年に代金の前渡してある軍艦の購入が目的で、結局米國が南北戰爭中佛國より買つた甲鐵艦ストーンヲールを讓受け、殘餘金で銃を買つたのであるが、アイロンコロート圖とは、恐らくこのストーンヲール號の圖ではなかつたかと思はれる。

(一〇二) 福澤は渡米中委員長小野友五郎と意見が合はず、毎度衝突したので、歸國後小野の申立により、謹愼が命ぜられたのである。これと同時に、福澤が米國で買入れた多くの原書をも差押へられたのである。

(一〇三) 亞行紀事は恐らく再度の米國行の旅行記であらうと思はれる。今日知られる再度の米國行に關する資料としては、小型和綴の手扣が存するのみである。歐州行の時にこの様な手扣の他に『西航記』と稱する旅行記があるのであるから、今度も『亞行紀事』と稱する旅行記があつても別段不思議はないが、只今日では全くその存在を知る事が出來ない。

(一〇四) 旅案内とは『西洋旅案内』のことであるが、九月七日付山口良藏宛書翰の中で、此節は「引込公務無之候に付七月中より西洋旅案内附り萬國商法と申平假名附二冊物の書を著述致し當月末方には彫刻成り製本出來可申候」と云つて居る所より考へると、七月一四日謹愼を命ぜられてより、一七日迄の間に一應書上げられたと見る可きであるが、餘りにも時間的に短か過ぎる。恐らくそれ以前より準

備して居たのを、謹愼を幸に一氣に書き上げたものと見る可きであらうと思はれる。猶木村に見せたのは、旅案内の草稿であつたと思はれる。猶（一〇七）の亞行紀事は或は『西洋旅案内』を指すとも考へられない事はない。

（一一二）福澤の謹愼解除については、自傳に、中島三郎助が老中稻葉美濃守に談判して福澤を出仕せしめるに至つたと述べている。

（一一三）前述もした如く、福澤は米國旅行中の罪で謹愼を命ぜられた際、其の荷物も差押えられたが、この荷物は仙臺、紀州兩家から金を預つて買つて來た原書の他に、福澤もあらん限りの金を工面して購入して來た原書であつた。所が福澤は謹愼が解けて出仕する様になつたが荷物の方は一向差押へが解けなかつたので、種々運動した様で、謹愼解除の前から、紀州家を通じて差押解除の事を運動して居たが効果がなかつた、かくて木村にも依頼したのであらう。織田和泉は、織田信重でこの時は勘定奉行並を勤めて居た、長井筑前は長井昌言で當時目付である。古賀筑後は、蕃所調書頭取を勤めた古賀謹一郎で、この時は目付である。この木村の運動と前記紀州藩からの運動と合まつて、間も無く差押へが解除された様である。

（一一五―一一六）福澤は前年末再び新錢座の木村家の近くに、有馬家の中屋敷の賣物に出て居るのを求めて、こゝに塾舍を移轉する事となつた。此の塾舍は百人の寄宿生を收容するといふ、當時では最大の塾舍を意圖したのであるが、學生の數はこれとは逆に次第に減少して行つた様である。ここに云ふ學校の相談の内容は明らかでないが、恐らく百名の寄宿生を收容する塾舍の入手についての相談ではなかつたかと思はれる。

（一一八）福澤が塾生を木村家に置いたのは、單に塾舍の狹いだけの理由ではなく、時局柄木村に萬一の事があつてはと、ひそかに木村家の護衛の意味もあつての事である。

木村芥舟の「福澤先生を憶ふ」に「慶應義塾は此頃弟子

いよ〳〵進み、其數已に數百に達し、復た舊日の比にあらず。或夜神明社の邊より失火し予が門前まで延燒せり。先生の居同じく戒心あるにも拘らず、數十の生徒を伴ひ跣足率先して池水を汲ては門前に運び出し、泥塗滿身、消防に盡力せらるゝこと一霎時間、依て辛うじて其災を免れたり。其後暴人江戸市街に横行し良家に闖入して金錢を掠るの噂ありし時も、先生頗る予か家を憂慮せられ、特に塾員に命じ來て予が家に宿泊せしめ晝夜警護せられたることあり。其厚意今猶ほ寸時も忘るゝこと能はず。」とある後半の記事は、おそらくこの時のことをさすものと思はれる。猶、前半の神明町よりの出火の話は、慶應二年四月朔日の事で、日記（六八）の時の事である。

（二三五）　福澤は此日德川家に御暇願を差出したのであるが、其の前日、親友山口良藏に「一德川樣御名跡も駿府に定り候よし小生は三月來大病にて引籠何事も存じ不申德川家へ御奉行いたし不斗も今日の形勢に相成最早武家奉公も

澤山に御座候此後は双刀を投棄し讀書渡世の一小民と相成候積左樣御承知被下度候」と書き送つて居る。福澤の幕府への御暇願はこの頃と推定されて居たが、此の日記により明確になつたのである。

（二三六）　明治政府より出仕を命ぜられたのであるが、勿論前述の山口良藏宛書翰の如き心情と、新政府がやはり攘夷政府であるとの考へがあつた爲に、福澤はついに出仕しなかつたのである。

慶應四年七月二八日の記述で、木村日記の福澤の記述は終つて居る。文久元年十二月二一日から、一三三ケ所の多きを數へて居る。福澤と木村の交渉の深さを充分讀みとることが出來る。福澤に關する幕末の資料は比較的少いから、木村日記の福澤研究に占める地位は頗る大きいと云はねばならぬ、然しそれ以上に、幕末資料として、木村日記の持つ意義は大きい、いづれ機を改めて、これら日記を紹介してみたい。